平成30年（2018）
阿づまの光
6月号・Junio

教主さまお作 灰釉茶盌 銘「大草原」

【ヨルダン土　モンゴル大草原の草釉】

大本東京本部
開設50周年

題字 出口直日

通巻第591号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 猪子 恒
〒110-0008
東京都台東区池之端2-1-44
TEL 03-3821-3701
FAX 03-3821-5283
振替 00160-5-72625
URL http://oomoto-tokyo.com
Mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

他力即自力、自力即他力

東京宣教センター次長　橋本伸作

出口王仁三郎聖師さまのお歌に、

一人一人同じ神業なしと聞く
　さればうらまじひとの役目を　（『大本の道』）

とございます。また『大本神諭』にも「一人々々に御用が違うぞよ」と示されていますように、それぞれに異なったご用が与えられています。

みんなが社長になれるわけではなく、芸術家になれるわけでもありません。それぞれの因縁や、必要に応じて神さまが少しの才能と方向性をお与えになり、ある人は社長、ある人は芸術家、大工さんなどをさせておられます。しかし、それでは人間が機械同様になってしまうので、神さまは人間に自由意志をお与えになり、あたかも人自身の努力によってそうなったようにさせておられます。そのおかげで、生きがいや喜びを感じ、希望を持って生きることができるのです。

「他力即自力であり、自力即他力である。ただし、他力をもととしての自力である。とともに、自力のないところに他力はない」（『信仰覚書』第七巻）

との尊師さまのお示しを拝すとき、あらためて神さまによって生かされており、人間的努力がなければ真のお力も頂けない、ということを思わせていただきます。

どんな些細なことをするにしても、その時の気持ちが愉快であり感謝に満ちていれば、自ずと天国を作ることになり、どんなに立派に見えることであっても、利己的であったり、不平不満であったり、悪意を持って行ったことは、かえって悪因縁を生むだけだと教えられています。・・・と、頭では分かっていてもなかなかできませんが、それもまた、ありがたいことなのかもしれません。

「省みない者には自分の癖は分からない。自分の癖の分からない者には、自分を培うすべは分からない」（『信仰覚書』第六巻）

今月の聖言

天地（あめつち）の中（なか）にありとし在（あ）るものは
神（かみ）のあたへし宝（たから）なりけり

出口王仁三郎聖師

没後100年
大本開祖・出口なおの生涯に学ぶ

出口なお開祖が大正7（1918）年に昇天してから100年。開祖は天保7年に現在の京都府福知山市に出生。幼少のころから他家に奉公するなど、貧苦の連続でした。明治25年に大本が開教して以降、「世界の大難を小難に、小難を無難に」と祈り続けた、その生涯に学びます。

大本の開教

本題について述べる前に、大本の開教について触れておきたいと思います。

太古の昔、この大地をお作りになった神さま、国祖（こくそ）・国常立尊（くにとこたちのみこと）が、世界を治めておられました。一旦はとても良い世界が樹立されていましたが、世の移り変わりとともに、多くの神々の中に「われよし」「つよいものがち」のおごれる心が高まり、世が次第に乱れていきました。そこで、国祖は時節を待つとともに、神々の罪を一身に背負い、節分の夜に世の艮（東北の方角）に隠れてしまわれました。

それから悠久の歳月がながれ、地上の乱れは激しさを増し、陰から見守っておられた国常立命が開祖さまを通して、再び節分の夜に世にお出ましになり、世の中を立替え立直して、神が理想とする万民和楽の世「みろくの世」を建設することを宣言されました。これが経綸（「国家を治めととのえる」の意）宗教・大本の開教です。

苦難の日々

開祖さまについて、孫にあたる出口直日・大本三代教主は、「祖母は、かいつまんで言えば社会の下積みの中で、人間的不仕合わせの中で、もっとも立派に生きてきた人です」と述べています。

幕末の天保の大飢饉の中をお生まれになり、幼い頃から奉公生活を体験し、結婚後も、道楽好きの夫・政五郎さんに献身的に仕えられ、あらゆる艱苦にも耐えられました。やがて政五郎さんが病床の身となり、一家の家計は開祖さまにすべてのしかかりました。10歳のころに奉公先で学んだ饅頭作りを生かして饅頭屋を営みます。石臼を引いて饅頭を作り、それを子どもたちが売るのですが、それほど高額な売り上げがあったわけではなく、食事もご自身はほとんど召し上がらずに、子どもたちに分け与えられ、8人をお育てになりました。

やがて、当時の最も底辺の仕事であった紙屑買いまでなさいました。それでも貧乏崩れなど全くなく、木綿の着物を折り目正しく召され、髪の毛はきちんと結（ゆ）われて、子どもたちには家の周りに草をはやさず、他人の物には藁すべ一本も手をつけてはならないと、厳しく諭されたということです。

夫の政五郎さんは亡くなる直前に、開祖さまに最後の酒が飲みたいといいます。開祖さまは、「はい」とおっしゃって家を出ていかれます。といってお金があったわけでありません。最後の商売道具であった天秤を質屋に入れてお金を借りようとされましたが、さすがにお金にはなりませんでした。しかたなく知り合いに2銭ほど借りてお酒を求められ、政五郎さんに差し上げられました。政五郎さんは美味しそうにお飲みになってお亡くなりになったということです。

開祖さまは、そんな状況であっても、決して政五郎さんを恨んだりはしなかった。むしろ、まだまだお世話が足らないとおっしゃっておられました。

『お筆先』と水行

明治25年旧正月、いよいよ神懸りとなられます。それ以降、神さまのご啓示である『お筆先』がほぼ毎日、つぎつぎと出てきます。これが大正7年まで続きます。ざっとですが27年間は9000日あります。半紙20万枚、それを和綴じ本にされました。

『お筆先』をお書きになるときは必ず水行をなさいました。真冬のどんなに極寒の中にあっても、必ず水ごりをなさいました。1回にバケツ7杯かぶられ、7杯が終わると、神さまは「もう良い」とおっしゃいました。開祖さまがもう1杯かぶろうとされると、8杯目は周りに飛び散ってかぶることができませんでした。それで、神さまがおっしゃることは、少しも違わないのだということを、開祖さまは思われるのでした。当時の役員の四方平蔵さんが、翌朝、水行の場所に行ってみると、氷が7層に残っていたと伝えられています。

そうした行を20年以上もなさった。その後、神さまは、「もう水行は良い」とおっしゃったのでお止（や）めになりますが、そのあとは、ご自身で、柄杓（ひしゃく）にすくって水行をお続けになったということです。バケツより柄杓のほうが冷たかったのではないかという話もあります。

大難を小難に、小難を無難に

『お筆先』、すなわち現在の7冊の『大本神諭』には、「日本」という言葉が約490カ所出てきます。善と悪との戦いであるということが出てくる。悪神が日本を取る仕組みであるとか、このままでは日本が立ち行かなくなってしまうという表現も出てまいります。

世の大峠がくる、後戻りもできなくなっ

～21世紀・生きがい講座～

猪子（いのこ）　恒（ひさし）（大本東京宣教センター長）

てしまう、人民が三分になってしまう、という表現もございます。

世がつぶれてはいけませんし、大峠も悲惨なことです。開祖さまは、世の大峠を憂いられて、どうか大難を小難に、小難を無難に過ごさせてくださいと、ひたすらご祈念になられるわけです。

開祖さまの「究極の祈り」

その「祈り」の究極の場面の一つが「沓島（めしま）ごもり」です。沓島は京都府舞鶴沖に浮かぶ孤島で、大本では国祖・国常立命がお隠れになっていた場所と教えています。その手前に冠島（おしま）があり、ここは地元の信仰の島です。その奥に沓島があり、昔からだれも近寄ったことがない場所だと言われています。その冠島と沓島をお開きになったのが明治33年です。

沓島を開かれた後、開祖さまはもう一度、沓島に行かれ、ご神水を海に注がれます。そして、「この水が3年たてば世界に回るから、そうなると世界が動き出す」とおっしゃって、そのお言葉のとおり明治36年、日露戦争が始まります。当時の国力で10対1。とうてい勝てる見込みはありませんでした。しかも日本が宣戦布告をして始まった戦争で、国家予算の5倍も使っています。極めつけはバルチック艦隊が控えていましたので、日本は絶体絶命の危機に立たされていました。

そのときに、開祖さまは神さまのご命令で沓島へこもられるわけです。最初は一人で行くとおっしゃったが、周囲の人々が余りにも心配するので、若者2人が付き添うことをお許しなりました。

神さまは40日間、沓島へ行けとおっしゃいますが、そのときに持参した食料に驚かされます。煎り米2升、麦の粉2升、もみ米2升、砂糖1斤、これはどんなに考えても20日も持たない。まさに命がけであったと言えます。

沓島にこもられた開祖さまは、ご祈願とお筆先のご用に勤しまれます。ところが、10日もすると、若い2人は空腹に耐えかねて、もう体が持たないので帰りたいと言い始めます。開祖さまは「連れてこなければ・・・」と思いつつも気の毒に思われて、神さまにお願いします。すると、神さまは、もうご用がすんだので、明日、船が迎えに来る、とおっしゃったのです。すると、そのお言葉のとおり釣船がやってきて、無事に帰ることになるわけです。

その直後、日本はバルチック艦隊に勝利します。そのときの日本海軍の「戦艦三笠」で参謀を務めた秋山真之は、バルチック艦隊の進路を夢のお告げで知らされ、そのとおりに船が現れたので、あらかじめ計画しておいた戦法で勝利することができた、という歴史秘話も残っています。

いずれにしても、あの時、日本が負けていたら、ロシアの一部になり、日本はなかったかもしれません。それほど、大きな歴史の転換点であったわけです。

百万円の金より一握りの「お土」

「お土」、すなわち大地は、これからのキーワードです。

開祖さまは、いつもお土から上がったものを大切にせよとおっしゃり、ご自身もお土に親しまれました。

食生活は誠に質素で、大根の黄色くなった葉っぱまで丁寧に頂かれていたと言われています。食はきわめて細く、それも年齢によるものではなく、世の中の行く末を憂いられて、食べ物が喉を通らなかったからでありました。

明治33年ごろ、京都市にお住まいの方が開祖さまを尋ねて来られたときに、開祖さまがお食事をお作りくださった。その方の食前にイモが出されたのですが、開祖さまが一体どんなものを召し上がっておられるのだろうと思って覗いてみると、そのイモの皮が料理されて盛られていたのを見てびっくりしたという話が残っています。それくらい、天地のご恩ということに自ら厳しく徹底されました。

開祖さまは「百万円のお金よりも一握りのお土のほうがどれだけ大切かわからん。金はほろびのもと。このことが世界の人にわかったらみろくの世になるのじゃ」とおっしゃったといいます。これは歴代の大本の教主に連綿と受け継がれているお諭しです。

最後に開祖さまのお歌をご紹介します。

ともしびの消ゆる世の中いまなるぞ
さしそへいたす種ぞ恋しき

「ともしび」というのは日本のこと、あるいは神さまの教えのことです。経綸は厳然としてあるけれども、それが消えそうになっている。だから差し添えの種になってほしい、脇差しになって手助けしてしい、今でもそのように祈り続けておられるように思えてなりません。

掲載文は、平成30年1月17日に航空会館（港区新橋）で開催した「21世紀・生きがい講座」講演録の要旨です。